

IV なぜ、コレが嫌われるのか

1. 「つまんねえよ」と視聴者は言う

「下ネタ」「イジメや差別」の項に挙げられたような事例は、かつてなら収録や編集の段階で「つまんねえよ」のひと言で一蹴されていたのではないだろうか。

このぞんざいな物言いは、前の方で紹介した本にあった言葉の拝借なので、悪しからず。昔、バラエティーは、あまたの制作者や放送作家や出演者がよってたかって競い合い、夢中で作っていたが、誰かの「つまんねえよ」のひと言で、多くの関係者が自信を失い、脱落していった、という話のなかで出てきた台詞だった。

「下ネタ」は、たしかに、時と場合によっては面白い。けれども視聴者は、それは公衆の面前でやってみせることでもなければ、面白がるものでもないことを知っている。ましてそれをテレビでやって、子供に見せるのはいかがなものか、無理して見せるのは、大人としてみっともない、と言っているのである。

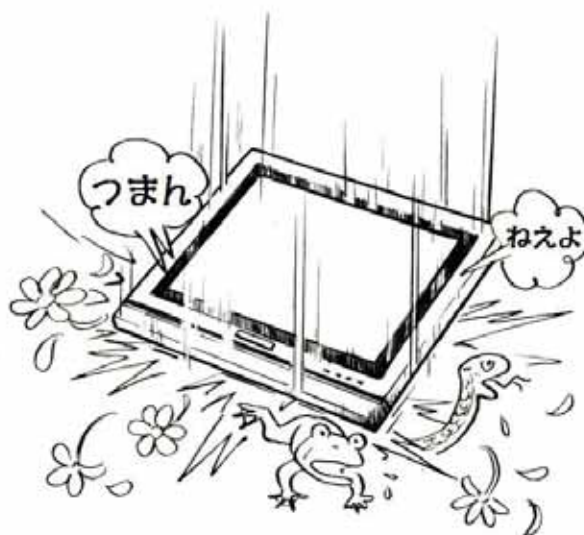
「イジメや差別」もそうである。

いまどき顔が黒いといって囃し立てたり、イジメまがい、セクハラまがいの台詞やアクションで笑いを取ろうなんて大人げないし、みっともないし、そもそも芸がない、と視聴者は見抜いている。

経済も政治も文化もグローバル化し、日々、人種・民族・宗教による差別が紛争や戦争まで引き起こしている世界の現実がいやでも目につく昨今、相変わらずローカルに閉じこもり、ちまちまはしゃいでいるのは、いまやこの種のバラエティーだけじゃないかと憐れんでいる気配すら、ここにはある。

はっきり言って、遅れているのである。イジメや差別は昔もあったし、いまもある。それがいいというわけではないが、シチュエーションも手口も、現実の方がもっと生々しく、ずっと先にいっている。そのことの深刻さを知っている視聴者には、画面のなかの出演者がままごとをやっているようにしか見えないし、あるいは深刻な現実には単に追随しているようにすら感じてしまう。

「内輪話や仲間内のバカ騒ぎ」となると、そんなの、ウチで勝手にやっててください、テレビでやらなくていいです、と突き放している。ここでも、どうせ打ち合わせ済みだとしても、大の大人がガキっぽいイジ



者3万人だのが次々と問題になるのか。なぜそのたびに世の中は縮み上がるのか。

こうしたものの背後に、あるいは根元にあって、世間と世の中と世界を采配している巨大な力は何なのか。それはひとつなのか、百なのか、千なのか。その正体をどうやって見抜き、どう名づけるのかについて、世界中の政治・経済の実務家たちとアカデミズムや芸術・文化のクリエイターらが考え、悩み、試行錯誤をつづけている。

だから、と委員会は言いたいのである。

バラエティーにはチャンスがある、と。

バラエティーは過去半世紀余、雲上の王様ばかりか、世俗にまぎれ込んだ王様まで見つけ出し、笑い飛ばしたり、面白く、わかりやすく正体を暴いて、からかってきた経験がある。その高等なノウハウを現代の王様探しに活かし、あらたな「庶民の笑い」を作り上げたら、上記各界人士を出し抜いて、はるか上をいけるかもしれない。

ちまちまと、ドメスチックなおふざけでお茶を濁している場合ではないのではなかろうか。